

自然と神秘性について

若芽が萌えでた藻岩山を眺めながら
そこはかとなく想う

山 田 稔

日本海が北に果つるあたり、内陸に向って約十キロの草深い開墾地で、私は教えの十歳まで育った。

春はフキ、ワラビ、タケノコ狩り、夏は、八月まで数ウグイスの声を聞きながら野生のスミレ、アヤマに戯れるの小鮎つり、ドジョウ取り。秋は、コタワに山ブドウ。見上げる空のつきるところ、見目うるわしい利尻岳の秀峰さて、冬ともなれば、原始林の奥から細い雪道を凍るような鈴の音をふるわせながら、木材を積んだ馬ソリが何台も続いた。そこには、おとなも、子供も、すべてが自然にとけこんだ生活があった。

待ちかねていたように、数えて十歳の正月がくると、私は三学期から知人の宅に預けられて町の学校へあがった。ここは、ハマナスや、スズランの美しい浜辺があった。小学校をおえる時、さらに遠くの町へと移ったが、夏休みになると開墾地の家に帰った。そして、人も馬も建物も、すべてが緑に染まるかと思わせる自然の中で、涼しいひと月の休暇を送るのが毎年の習わしであった。

はたちのころ、当時の若者の多くが苦しんだように私も胸を患い、幾度もぶり返えしたあげく、空洞と、喀血性の胸を抱いて原始林に囲まれたふるさとに帰った。特効薬というものは、もちろん、これという医療法はなく、転地するか、うまい物をたべて寝ているだけで、徳富蘆花の「不如帰」の浪子の運命をそのまま固く信じられていた時代である。

外での安静、一日数回飲む清らかな湧水、はだしの散歩、樹蔭を漏れる日光。まったく自然児となつて二か年。医師も、村びともびつくりするような健康をとり戻して、また、都会の生活に戻った。私は自然の底知れぬ力に、ただただ、ひれ伏したのである。

このとき私は、自然の神秘さを、ほんとうに知った。そして、このときから自然の尊さを覚り、神秘な力を信じつづけている。風にそよぐ一木一草、散りゆく一片の病葉（わくらば）も、自然（神）の思召しのゆえである、と信ずるようになった。



してしまふ。自然の神秘力は、穴のあいた肺を短日月で完治する偉力を体にも与える。日光の殺菌力は誰も知るところだが、川の流れも、数百メートルにして結核菌を死滅させる。まことに、自然の偉大な力は、まさしく神の力である。自然をおそれざるものは、神をおそれざるもの——であらう。

□

〔仕事の関係で札幌のビル・アパートで生活している私の友人が、学校の休暇に東京の家族を呼ぶと、必ず幼いほうの子が体の調子が変わるので、やむなく木造家屋に引越した。ビルの事務所や鉄筋アパートの鉢の草花が育ちづらいのは、誰でも経験するところである。〕

人類の歴史は自然との戦いであり、その征服であるという。なるほど、それにちがいない。しかし、人間は自然から生まれ、自然に育てられてきたことも事実である。そしてその中で、自然を愛し、自然を尊び、自然の姿を大切に育ててきた民族は、心も優しく栄えていることを私たちは知っている。人間個体にしても、自然を愛し親しむものは健康であり、自然にそ

むくものは心も荒れることは、私たちの常に見聞するところ、まことに自然は慈母のふところである。

観光事業が、年ごとに旺んになるとはいふことである。問題は、その対象をどこにおくか、また観光資源に対する考え方、扱い方である。未知の土地、由緒(ゆいしよ)ある建造物も、それなりに価値ある対象である。

また、観光は産業であり、天然自然に大いに人工を加えてこれを売り出し、旅行客を多数動員して遊業の気分を満喫させることこそ産業として発展させる道である。と削り切った考え方もある。もとより、産業と考えていこうに悪くない。産業として成り立ってこそ施設も可能であるし、大衆も動員できよう。

しかし、今日、産業界の新しい理念は国家的経済の視野からの社会性、公益性が強く要請されている。いわゆる観光は、名所旧蹟の歴史、由来を訪ねては、遠い民族の祖先の文化を知るにあるし、太古の姿そのままに接しては、その神秘さに打たれて心を洗い、万古の風害に耐えぬいた雄々しさに、逞ましい精神を養うにあらう。もし、自然を俗化し、遊覧の道具に化しては

たとえ、おびただしい大衆を集めたとしても、あとに残るものは、紙屑の山と観光者の浪費と疲労だけであらう。

近年、道内の市町村が繁栄策のひとつとして、天然資源を観光資源として開発しようとする意を注いでいることは、それ自体悪くない。いや大いに結構である。都塵にまみれた人びとを招き、身心を蘇生(そせい)させることは素晴らしいことである。ただ、ねがわくば、立派な自然の姿をいかに保存し育てるかに全智をしぼってもらいたい。

原始林に道路だけ通し、軒を並べた土産物の店もなく、ただ、有るは公共休憩所のみ。数知れぬ小鳥の合唱に迎えられ、樹海を出て、かつ沈む太陽に送られる、といった観光地が道内各地に生まれるならば、そこを訪れる道の内外の人びとは、きつと太古に連なる神秘さに打たれ、神の声を聴くであらう。自然の真骨頂は、その神秘性にある。

□

しかし、このような注文は、どうも無理のようである。北海道の首都として、道内の行政の指導的立場にある札幌市の樹木に対する愛情の程度を見る

と、そう思わざるを得ない。先年、車道に少々出っばつていている原生の大樹が、車の邪魔になるので切り倒すというところが市民の議論となったとき、現代日本「良識」のひとり坂西志保さんが、「木を切らずに、道を曲げたらいい」といわれた。まことに名言というか、素晴らしい発想である。が、しかしその木は切り倒されてしまった。

かつては、国内でも名高く、市民も誇りとした札幌駅前通りのアカシアの並み木は切り倒され、その代りに植えた若木は、歯の抜けたように、あちこち枯れたままである。

いやそれどころか、この稿を書いている四月二十九日の北海道新聞の夕刊は、〃やせる植物園 原始林一角ぼさり 冷たい仕打ち……と悲しむ〃と、社会面トップ六段見出しで、植物園の原始林の一部が道路になると報道している。北大植物園の原始林、直径一メートル、百五十年の年輪を経た樹木たちをはじめ百二十五本(うち三十数本は移植で助かるらしい)が、道路拡張の犠牲になるとのこと。都市計画法に基づいてのことだそう、五年越しの北大側の抵抗もついにむなしく……〃ほかに打つ手はないか〃とこの

記事は訴えている。

そして、その対抗面には、町村知事原田市長の「緑の羽根」の街頭募金の写真が大きく掲載されている——いかにも皮肉るかのよう——植林思想の涵養（かんよう）は、いくら力をそそいでも過ぎるということはない。北海道百年、札幌創建百年を寿ぐ記念事業記念行事ももちろんいい。と同時に、札幌の開けゆく百年の足どりを、じつと見てきた植物園の——いまや切り倒される運命にある——ハルニレ、シコロ、センノキ、イタヤが市民に、先人の苦闘を語っていることを忘れてはならない。

その昔、尾崎行雄が東京市長のとき、日露戦争の際、日本に多大の好意を示してくれた米國、ことにわが外債募集に尽力してくれた米國財界の有力者シッフ氏の親切にたいし、三年生のサクラの苗木三千本を贈った。それが今日の有名なワシントンのポトマック河畔のサクラの並木であるが、太平洋戦争のさ中、市民のひとり敵國の花という憎悪心からかそのひと枝を手折った。ところが翌日の各新聞は、こぞつてこの人を紙面で袋叩きにしたというのである。花鳥を愛する日本人の

「風流」はいつの間にか流亡し、いまや諸外国にそれを学ばねばならぬとは淋しい。

北海道は今後、国内増加人口の移植地として、あるいは工場建設地としてそしてまた三、五十年後に世界を襲うであろうといわれる食料不足に備えての、わが國食料基地として、いよいよ重要性を増している。そして、道内には今後の可耕地二百三十万ヘクタールが新たに発見され、この開発が目下問題になっている。おそらく昭和四十六年から始まる第三次総合開発計画では、当然この開発が具体的な日程にのぼるであろう。

林道と観光道路の一体化、牧牛の群れる草地と観光など、「綜合」の名に恥じない雄渾な計画こそ、開道二百年目へと指向する姿勢ではなからうか。高山植物は山岳で、ハマナスは砂丘で、スズランは野辺でこそ美しくもあり、豊かな诗情も深いもの。そして、それに触れようと杖を引いてこそ意義がある。美しいからといってサクラの小枝を手折り、梅花一輪を持ち帰えることが許されないと同様、スズランや高山植物の街頭売りは、心なき自然への冒瀆の姿であろう。

街路並木も、人工樹林も、それなりに麗しくはある。しかし、神秘を求めることにはできない。神が種を蒔いて幾百年、人工を加えないところに、人の心を打つものがある。それが私たちの心を引きつけるのである。ひとたび破壊された自然は、現代の科学をもつてしても復元はできない。

北海道の百年は自然の征服にあったが、自然を尊ぶという側面が余りにもな過ぎた。大銅博士のお説によると「道内ではんとうの秘境といえるのは、もう島牧の山しかない」そうである。開拓百年にして、北海道の秘境を掠奪してしまったのか。遅ましいといえはいえなくもないが、百年目に島牧ひとつしか残さなかったとは、ひどい話である。

□

とにかく、今後の観光資源開発は、人工をいかに少くともめるかに智脳をしばってほしい。札幌市は市民の水を確保するために、いよいよ豊平峽ダムの工事を開始し、やがて、原始林に囲まれたダムを観光資源として売り出す計画である。

ねがわくば、この新観光地の施設

は、土ぼこりの立たない道路と公共休憩所程度にしてみらいたい。営業的な施設を排し、ガソリンをたく車も禁止して、散策とピクニックの道路を失った札幌市民が、安心して歩ける道にしてみらいたいものである。

□

藻岩は、日ごとに緑を増している。

この山は、終戦直後、東面する中腹から一部が丸裸に伐採された。当時、伐つた者より、許可した者の頭脳を疑ったが、このみにくい乱暴な傷跡も、近年は若木が生え繁って、日だたなくつた。それにしても、札幌市交通局はこの山を観光資源として独占し、毎年麓と頂上かなりの投資をしている。

交通事業は赤字というから、藻岩の観光事業を黒字経営へと努力するのは当然なことである。そうではあるが、施設はその種類と規模とをよく考究してほしい。要は市民の「遊び場」でなく「健康の場」ということを軸にしてほしいのである。市民もまた、たまには札幌養老院の横から登って、自然に接することである。汗を流して自然の神秘に触れるところとして藻岩は在る、と考えたい。（北海道武蔵女子短大講師）